

「須波麻神社のおかけ燈籠」

シラカス



須波麻神社の境内に上がる階段の手前に、1基の石燈籠があります。この燈籠は、江戸時代後期の文政13年(1830)に、伊勢神宮への集団参詣「おかけ参り」を記念して建てられた「おかけ燈籠」で、当初は須波麻神社から500メートルほど西の東高野街道沿いに立っていたそうです。燈籠の竿(柱)の各面には、大坂・京・太神宮(伊勢神宮)・高野山などの行き先と方角が刻まれていることから、街道を往来する旅人のための道標として利用されていたことが分かります。

また同じ年には、河内地方を中心に、人々が派手な衣装を身に著けたり、仮装をしたりしながら乱舞する「おかけ踊り」も流行しました。須波麻神社のおかけ燈籠には、「御影踊連中」の文字が刻まれており、当地でもおかけ踊りが盛んであったことがうかがえます。中垣内村では、これより少し時代は下りますが、幕末の慶応3年(1867)にも、伊勢神宮のお札が天から降ってきたことを祝う「ええじゃないか」の踊りが大和国(奈良県)から伝播し、再び熱狂の渦に包まれました。

江戸時代、庶民の間では、「おかげ年」(式年遷宮の翌年)に伊勢神宮に参ると特別な「おかげ」(恩恵)が得られると信じられ、多くの人がおかけ参りに旅立ちました。おかけ参りの大流行は、およそ60年の周期で発生しており、文政13年には400万人以上の人が伊勢神宮に参詣したと言われています。当時は、雇い主や親の許可を得ずに無断で「抜け

参り」を行う人も多く、彼らは道中で食料や金品の施しを受けながら、伊勢をめざしたそうです。現在市内には、江戸時代後期に建立されたおかけ燈籠が、須波麻神社の他に、寺川・三住町・栄和町・御領・灰塚・諸福にも残っており、多くの民衆が熱狂したおかけ参りやおかけ踊りの記憶を今に伝えています。

(生涯学習課)



須波麻神社のおかけ燈籠



おかけ燈籠に刻まれた文字
(大東市文化財ガイドブック「石の文化財」より)

「鳳字寺」文化人が集うかつての「厄寺」



前回紹介したおかけ燈籠の左手には、北側の古堤街道へ抜けていく細い坂道があります。道の東側は崖地となっており、その上には阪奈道路の上り線が通っています。おかけ燈籠から50メートルほど北へ行くと、右手に役行者の石像が見えます。役行者は、奈良時代に修験道という山岳信仰を創始し、神秘的な靈力によって多くの人を救済したとされる伝説上の人物で、古くから庶民の信仰の対象となりました。市内には、当地以外にも龍間・北条・赤井・灰塚・新田に、役行者の像がまつられています。

さらに10メートルほど行くと、左手に如意輪観音を本尊とする曹洞宗永平寺派の寺院・白雲山鳳字寺があります。鳳字寺は、江戸時代中期の享保5年(1720)、円随文心という僧が開創したと言われており、昭和17年(1942)に正式な寺院となるまでは「鳳字庵」という名称

でした。かつては、現役を退いた老僧が住む庵(隠居所)として用いられた、明治初期の神仏分離以前は、老僧が須波麻神社の宮司を兼ねていたそうです。江戸時代後期の文政3年(1821)に恵海尼という尼僧(女性の僧侶)が止住して以後、平成19年に先代住職の弘禪尼が引退するまで、当地付近で唯一の厄寺としても知られていました。

鳳字寺の敷地内には、昭和2年に改築された堂庫裏(本堂と庫裏を兼ねた建物)のほか、昭和40年に建てられた茶室・白雲閣、平成11年に建てられた持仏堂などがあります。当寺では、50年ほど前から、先代住職を中心に茶華道や絵画などの催しが盛んに行われるようになり、地元の文化人の社交の場としても親しまれています。

(生涯学習課)



役行者像



如意輪観音像



鳳字寺